

## 大越愛子さんとの縁に念う

宋連玉

大越さんと私が巡り合ったのは金学順さんの衝撃的なカムアウトがきっかけとなっている。「慰安婦」被害者についてともに考えようと、直後に企画された琵琶湖合宿で初めてお会いしたように覚えている。しかし常にグループの一員として参加していたために、個人的なお話を交わすことはなかった。

私は、中・高一貫のミッションスクールで学んだとき在日朝鮮人であることで受けた「いじめ」により、長い間、出口の見えないトンネルのなかで苦しんだ。そのトラウマから、日本の中産階級の「お嬢さん」たちへ拭えない不信感、警戒心をもちつつけた。さまざまな差別に抗して活動し、研究している人であっても、まさかの時に豹変して差別的な本音を露わにするんじゃないかと恐れているところがある。

大越さんと個人的な話をするようになったのは、2003年、カナダ・バンクーバーに滞在していたときだった。大越さんが UBC 女性研究所の招きで来られた時に、大越さんの講演を聴きに行ったと記憶している。異国での再会は人恋しさを埋めてくれる魔力があるのか、大越さんと「鎧」を脱いで話せる機会が持てた。大越さんのカナダ在住の友人宅にもごいっしょさせていただいたし、カナダに滞在していたご子息の婚約者の方も紹介していただいた。

大越さんと日本で再会したのは、それから多くの時間が経過した後だった。病に倒れた大越さんが息子さんたちの住む東京へ大阪から転居して来られたのだが、転居先はさいわい私の住む所からそう遠くないところだった。久々にお目にかかった大越さんは、ご病気の後遺症で歩行するのが不自由そうだったが、なによりも心痛めたのは以前のように流暢にお話しできなくなっていたことだった。

フェミニズムがさまざまに分裂し、とくに自己解体を拒否し、「男性」中心主義体制へと回帰する「フェミニズム」に対し、舌鋒鋭く批判してこられた大越さんだけに、ご病気になられたことがどれほど無念だったろうかと思うと、かける言葉が容易にみつからなかった。さいわい、お母さん思いのお子さんたちのサポートで安心した日常生活を送っておられた様子に胸をなで下ろした。

いま、再会が叶わなくなった大越さんと対話するには、書かれたものを丹念に読むしかない。追悼するつもりで、私の心にとまったところを以下に紹介してみたい。

戦後日本体制の批判的分析にあたって、大越さんは丸山真男、柄谷行人、鶴見俊輔、吉本隆明らをあげているが、とくに鶴見に対しては男性中心体制の枠組み内におけるジェ

ンダー問題の利用に巧みだった知識人との評価を与えている<sup>1</sup>。

鶴見は、私が韓国で学んでいた1972年に、詩人、金芝河に面会するために韓国へ行っている<sup>2</sup>。当時、金芝河は、軍事独裁政権を批判した詩「蜚語」の筆禍事件で逮捕され、過酷な拷問のために病に冒され、馬山(釜山の西)の療養院に入院していた。鶴見によると小田実に命じられたということだが、金芝河に面会して鶴見は「あなたを死刑にするなどという趣旨で、世界中から集めた署名があります」と言ったそうだ。すると金芝河はたどたどしい英語で、「あなたたちの運動は、私を助けることはできないだろう。しかし私は、あなたたちの運動を助けるために、署名に参加する」ときり返した。軍事独裁政権を支える日本の政治を変えずして、署名を携えてきた鶴見への、あるいはそれに連なる「良心的知識人」への痛烈な批判である。

この署名集めに関わった、日本を代表する知識人たちは後に「国民基金」を創設していくのであるが、大越さんは馬山への面会や「国民基金」とは別に、鶴見の思想を「自身のジェンダーが内包する加害性を内省する視点を持たずしてジェンダーを論じるのは(中略)他の性を彼らのジェンダー体制の中へ囲い込み、しかも両者の権力関係を隠蔽している」が「彼らはそのことに無自覚」だと批判する。署名の件、「国民基金」と大越さんの批判するジェンダー論がみごとに底辺でつながっているのである。

鶴見の「転向研究」は、日本的知識人の内面研究としては優れているが、そのように変容することで戦争に加担していった彼らの加害的側面への問題意識は希薄だと大越さんは批判する。鶴見のように問題を心理主義的に還元する姿勢は加藤典洋に受け継がれていることも見逃してはいない。

今日の日本リベラル派の頹落を早くから察知し、戦後日本体制の批判的分析を体系化しようとしていた大越さんの遺された課題を継承することで、私なりの追悼を続けていきたいと思う。



<sup>1</sup> 「フェミニズム的転回するとき」『フェミニズム的転回—ジェンダー・クリティークの可能性』白澤社、2001年。

<sup>2</sup> 鶴見俊輔・上野千鶴子・小熊英二『戦争が遺したもの』岩波書店、2004年、336頁。